

上野俊樹さんを偲んで

三好正巳

ヘーゲルは、「精神は本質的に活動性である」といつている。精神は存在するもの、直接完成したものではなく、むしろ自分自身を生み出すもの、純粋な活動性、精神自身について即時的に作られている。「ヘーゲル主義」の超克を志した上野さんのいま、昇華した「精神」は、なお、今も活動している、と確信している。また、これからも活動するものであってほしい。それほどに、上野さんは、社会に深い関心をもち、現状を憂うていた。「時代」は、上野さんのような人を必要としている。

今年は、年賀を辞する「喪中の挨拶」が、例年になく多かった。高齢社会が、そろそろその縁にいたったことかもしれない。挨拶状によれば、中には若くして死去した知り人も幾人かいた。息災に活動しているものと思いこんでいた人たちの訃を告げる挨拶状に、愕然とすることであった。その挨拶状には、上野さんの奥方からのものも、含まれていた。あらためて、上野俊樹さんの亡くなったことを思いつつ、2000年の新春を迎えたものである。

死、それは、有機体から無機体への転化である。死、それについて、ハイデッカーは、現に存在している人間を、「死への存在」ととらえていた。誰もが死、それを免れることはない。つねに死の淵にありながら、死、その場所について、人間は何も知らない。哲学者にとっても、死、それは人間にとって、現存在としての人間にとって、大変なことである。死、それは「恐怖」であるとともに、「魅力」であるともいわれる。釈尊は、死、それを無視することで、その「恐怖」から免れようとしたという。「解脱」は、しかしわが身にとって、生やさしいことではない。上野さんは、其処において、何を知り何を思っているだろうか。

上野さんと最後に会ったのは、彼が入院療養の直前であった。今にして思えば、なぜ彼は、自転車に乗っていたのか。それは新年度開講前の琵琶湖・草津キャンパスであった。検査して手術するのだが、たいしたことは無い、というのがその時の上野さんの口振りであった。また、顔色も、素人目には元気そうに見えた。それから僅かの後には、重篤の病状と伝え聞き、とても信じられず驚いたものであった。

上野さんとは、関西産業労働問題研究会で、一緒であった。この研究会は、戸木田嘉久さんと上野さんの話し合いの結果発足したものであった。たしか、京都河原町界隈の喫茶店で、話は決まったことである。私も話し合いに陪席した。激動の予兆が見える社会の状況に、なかなかついていけない労働運動の現状を憂い、研究者と活動家が現実の問題状況を掘り起こす努力をすべきではないか、というのがその時の一致した見解であった。とくに若手の研究者を広く集め、活動家の話を聞きながら、労働運動の現状を検討し、将来の展望を一緒に考えていこうということが合意された。今は、やや規模を縮小することになったが、当初は、京都と大阪とで交互に研究

会をもつほどの、活発な研究会であった。当初から、そして現在でも、研究会の主要なメンバーは、上野さんが手塩にかけて育てた研究者たちである。上野さんが亡くなってからも、衣鉢を継いだメンバーが中心となって、研究会をもり立てている。これも、上野さんの遺徳の一つである。

私などからすれば、とても真似のできそうにないことだが、上野さんは多くの人を教化できる「教祖」たるべき十分な資格をもった人であった。「教祖」となれる資格というのは、ある意味で「狂気」をもっていることである。「狂気」というと、何か病的なものと理解されがちだが、そうではない。「狂気」、それは [英] mania [独] Manie [仏] manie である。プラトンは、芸術（ないし天才）と「狂気」との関連に注目した。天来の「狂気」は、詩作の瞬間にはたらく「非合理的の靈感」ととらえられる。ゲーテは、芸術にはたらくデモーニッシュ [Damonische] などの力を指摘している。それは芸術における非合理的、本能的生産力、また、これこそ上野さんにはふさわしいが、ある人間の特有の出生に際して付与された守護的、指導的霊としての、霊の力を付与された「天才」である。上野さんには、そうした「狂気」があったし、創作心理学上でのいうインスピレーションを生得のものとしてもっていたと思う。

ともかくも、天は惜しい人材を早世させたものである。

今、ここに、上野さんの著作がある。『経済学とイデオロギー』である。奥付けによれば、1982年5月、有斐閣からの発行となっている。たしか、R.L. ミークに同名の著作があったはずである。上野さんの著作は、副題がついている。「経済学史の方法をめぐって」が、それである。1982年の発行といえば、上野さんが40歳ぐらいの時の著作である。「はしがき」によると、著作の「直接の動機は、現実の切実な経済問題の解決に、経済学史の研究がどのように関係するかを明らかにしたい、ということであった。経済学史の研究は、一般には過去の経済学的認識（史）のみを対象とする研究分野であると考えられており、こうした考え方では、経済学史の研究は結局のところ、既存の認識の内部にとどまることになる。しかし、科学の使命は新しい法則の発見にあり、これは現実を分析することによってしかおこなえない。われわれの認識の発展は、過去の理論が現実の事実を十分に説明するものではないという問題意識が生まれ、それが出発点となって現実の分析がおこなわれる場合に生じる。したがって、経済学史の研究が既存の認識の内部にとどまっているかぎり、そうした研究が新しい法則を発見することは一般にはありえないであろう。」と述べている。過去の理論の限界を反省し、それを出発点とした「現実の分析」がおこなわれるときに、認識の発展があるという主張である。

上野さんが志したのは、「時代と格闘しないで、既知の理論のみ拘泥する解釈学」を乗り越えることにあったといえる。そこで、はっと気がつくことがある。上野さんの著作・編纂活動が、『現代の国家独占資本主義』上・下（大月書店、1987年）や『現代資本主義をみる目』（文理閣、1993年）を世に問うことになったのも、「時代と格闘」することであったということ。また、こうした成果をもののできるだけの、人材を養成しえたことを、あらためて納得させられるのである。もちろん、経済学史のあり方として、異を唱える人は多かろう。私にしても、やや見解を異にしている。マルクスは、剰余価値概念を軸にして既存の経済理論を整理した。剰余価値概念こそ、国民経済学批判を志すマルクスにとって、経済学の根幹だったからである。経済学史は、「時代と格闘」する中でキーとなる概念を軸にした理論整理が必要だと考える。今、この時期、市場概念を軸とする理論整理が必要ではないかと思う。「時代と格闘」する中で、軸となるキー

概念は多様であり、したがって経済学史のテーマも多様でありえよう。

上野さんの薫陶を受けた人たちからすれば、彼は「教祖」であつたらう。こういう言い方をすると、上野さんが眼鏡の中のきょろりとした眼で、笑みをたたえつつも抗弁しそうである。上野さんに罪があるわけではない。上野さんを困む師弟関係を、ちょっと揶揄してみたくなる私のねたみである。ともかく、あれだけの人材を育てたこと、それは上野さんの大偉業である。実にいい人材が育っている。このことは、たとえ上野さんと時に対立することのあつた人たちも、また、袂を分かつことになつた人たちにしても、認めねばなるまい。人材養成はもとより、何人にも影響することのない無宗派・無教義の私は、まことに気楽である。上野さんの大偉業も、彼の「理論」に傾倒しつくす「信者」たちをも、この老骨の気分のいい浮かれた時には、ちょっと揶揄させてもらふ娯楽を認めてもらいたい。上野さんを敬愛するあまりの妄言を、「信者」のみなさんよ、許してもらいたい。

『経済学とイデオロギー』は、上野さん自身の告白するところでは、「見田石介氏の諸業績を前提として書かれている」ということである。第一章から第四章にいたる叙述は、私にとっても興味がある。かつて、松村一人氏の著作は、読みあさつたし、「ヘーゲル主義」の克服は、私にとってはどうであつたらう。上野さんのように、きちんとした克服の道はたどつてこずに、何となく克服したつもりでいるのが、今の私である。これを機会に、せめて、上野さんの著述のこの部分ぐらいは、真っ当に読みこなさねばなるまい。宇野弘蔵氏の著作は、氏の著作集が刊行される前に、およその著作は読み込んだつもりだが、今は、多くは忘却の彼方にある。私にとって、「ヘーゲル主義」の克服は、戦時国家独占資本主義の分析過程で可能になつたと自負している。その時において、何よりも大事なことは、「時代と格闘」する視点であり、身のおきどころである。無念なことだが、ある人たちは私の分析作業を「歴史」の叙述とみている。しかし、私は、この「格闘」によって、「ヘーゲル主義」を克服できたと思っている。上野さんが、見田氏の諸業績を追いながら、「ヘーゲル主義」を克服し、「時代との格闘」し続けた壮図には比べるべきものではないが、わが身の経験を重ねて、思えば何となく上野さんの思考に共感するものがある。

いろいろと上野さんとの関わりに触れてきたが、最近のもつとも密接な関係をもつてきたのは、関西産業労働問題研究会で、ご一緒したことである。この研究会の主力は、若い人たちである。といっても、みんな上野さんの薫陶をえて一家をなした人たちである。私などは、そんな人たちの報告に刺激され、耳学問させてもらうだけである。上野さんは、そうした愛弟子たちの報告に、鋭くも慈愛のこもつた啓示をあたえるのが常であつた。その啓示は、限りなく広い領域に及ぶ。恐らくは、「時代と格闘」する上野さんにして、はじめて可能なことであつたらう。関西産業労働問題研究会にとつて、上野さんは掛け替えのない人であつた。その上野さんの亡き後、どうなるのか心配であつたが、愛弟子たちは、衣鉢を継いでしっかりと研究会をもり立てている。これも、上野さんの残してくれた大きな財産であらう。

「青年論」、これも上野さんを語るときに欠かせぬ事柄である。いくつかの書かれたものがあつたと思う。ただ、手元に現物がないので、残念ながらここで触れることはできない。しかし、上野さんが、青年たちに、熱いメッセージをあたえ続けたこと、これは誰もがよく知るところであらう。また、学生を大事にしたことも、私は知っている。時に、そのことが誤解されることもあつたが、それも青年を大事にする上野さんの未来志向によって免ぜられ、許されるのではなから

うか。

語ることは、まだまだ尽きない。上野さんを偲ぶには、その学問業績とともに生き様を語らねばなるまい。元来の怠け者であり、引っ込み思案の私には、ただただ敬愛の言葉しかない。上野さんについてそれらを語る人は、他に適任の人があると思う。私としては、ここで筆を置くことにする。

上野さんの冥福を祈るとともに、残されたご家族が悲しみを超えて強く生きられることを願うものである。

（1999年12月）